

高齢者のテレビ理解に関する試論

村野井均*

（2014年11月28日受理）

Tentative Assumption about TV Understanding of Elderly People

Hitoshi MURANOI*

（Received November28, 2014）

はじめに

新しい技術は、子どもと高齢者に伝わりにくい。世の中では、大人だったらテレビを理解できると思われているが、本当なのであろうか。

映画が始まったころ、観客はスクリーンに映し出される蒸気機関車を見て、腰を浮かし、逃げた人もいたと言われている。そして、観客は映画が終わってからスクリーンの裏側を見て機関車を探したと言われている。現代では子どもがする行動と言われているが、かつては大人でも映像を見て、機関車が本当にいると思ったり（実在視）、機関車に轢かれる（スクリーンの中とのやり取り：交渉可能性）と思っていたのである。大人は、類似した映画を何度か見たり、映画の仕組みを知ったりすることで実在視しなくなるのである。テレビは、動く映像が家庭へ入った最初のメディアである。映画館と違って、観客数が少ないため、家庭に入ったときに視聴者がどのような反応をしたのか記録がない。特に、テレビをどのように誤解したのかという認知的研究は見当たらない。

山本ら（2002）は、高齢者がテレビを見て誤解する話を聞いた経験から、高齢者がどのような場面を理解できないのか、高齢者の間違い方は子どもとどう違うのか解明することを目的に、観察と聞き取りにより32事例を収集した。そして、テレビの読み取りを間違い原因を放送技術面、放送内容面、その他という3つに分類した。高齢者のテレビ理解という新しい分野に取り組み、高齢者へテレビの新しい技術をどのように伝えるか研究した点は評価されよう。しかし、その分類には子どもと同じような間違いとして「番組の区切りの理解」「役回りの理解」「アニメの理解」「交渉可能性の理解」が混じっていた。子どもの間違い方との対応を調べ、独立した分類を立てるか検討する必要がある。また、技術的な分類だけでなく、認知発達面から分類できる可能性もあった。

山本の事例を講義で紹介すると、大学生の感想文に類似した事例が書かれることがある。高齢化社会が進む今日、これらをまとめ、高齢者のテレビ理解の間違い方を分析し直し、特徴とその対策

*茨城大学教育学部学校教育教室（〒310-8512 水戸市文京 2-1-1；School Education, College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）

を提言する必要がある。

目的

山本ら（2002）は高齢者のテレビ理解の間違いを放送技術面から分類した。しかし、ザッピング対策でテレビ番組の構成が複雑化した現代では、高齢者の間違い方はより広い範囲に及ぶと考えられる。典型例ではあるが、高齢者の事例を山本の事例に追加して新たな分類を試みる。

方法

山本らの32事例に、大学生が書いた身の回りの高齢者の事例を加え分類を行う。

結果

事例を分類すると、高齢者のテレビ理解には、1、社会的知識の必要、2、新しい技術の理解、3、演技や役回りの理解、4、幼児と類似した間違い、5、高齢者独特の理解という5つの特徴が見られた。以下に事例をあげる。

1、社会的知識の必要

テレビは視聴者が放送の仕組みだけでなく、社会に関する知識を持っていることを前提に作られている。以下の2つはテレビを見るために社会的知識が必要なことを示している。

【事例1 近くでやっているんなら見に行く】

私が20才の頃（1970年代）、当時80才のおじいさんがテレビの相撲を見ていて、「これはどこでやってるんや。近くでやってるんなら見に行く」と行って玄関に出ていってしまったことがあった。当然そんなことはないので説明しても、画面はどこから送られてくるのかわからなかった様子でした。

大人にもかかわらず放送の仕組みが分かっていない例である。テレビを見て分かるためには、放送に関する社会的知識が必要なことがわかる。1970年代であれば、すでにテレビは普及しているため、高齢化に伴って、幼児と同じような実在視（村野井,1986）をし始めた例なのかもしれない。

【事例2 黒くなるまで風呂に入っていない】

私のおばあちゃんが、黒人のはだかですごす民族のテレビを見ていて「あーきたない。こんなに黒くなるまでお風呂に入っていないなんて。服もきせてあたらんやわ（著者注：服も着せてもらえないんだ）」といい、顔をしかめながらテレビを見ていた。

私はほけてもいないおばあちゃんが、こんなことを言うのにびっくりして、外国人や外国のことについて話をした。

映像の中の人たちを日本の基準で解釈している例である。テレビを見るには、人種・文化・風習の違いに関する社会的知識を持っていなければならないことがわかる。

この2事例は、学生の感想文に書かれていたものなので、時代や高齢者の認知能力などが不詳である。初期の映画の観客と同じような反応が、テレビにも生じていたと考えることができるといえよう。

2. 新しい技術の理解

テレビや映像をめぐる技術の進歩にはめまぐるしいものがある。新しい技術を知るためには、知り合い同士の雑談でたずねたり、新聞、テレビ、ネットから情報収集したりしなければならない。高齢者に新知識は伝わりにくいので、高齢者は誤解する。

録画や早送りが分からない例をあげる。

【事例3 録画映像の理解】

ビデオテープの少ない頃、生番組が多かった時に再生画面が入ると母親は「また同じ事をやっている。何べんも同じ事を繰り返している」と言っていることがあった。まだビデオの存在が母親に理解されていなかった時の話です。

生番組放送中に、録画映像が挟まれて放送されることが理解できていない例である。次の事例も同じである。

【事例4 再現映像の理解】

おじいさん（79歳）、おばあさん（77歳）

スポーツ中継の中でVTRの区別がつかず、ホームラン等の画像を流していると「あっ、またホームラン打った。」などと言うことがある。

“前に起こったことをもう一度放送する”という技術がわかっていない例である。テレビの中で流れている映像は、すべて生放送と捉えているのであろう。

同じような例はサッカーでも聞き聞く。サッカーでは、得点が入るとその場面を別の角度から撮影したものを続けて映す。ゴールの裏から網越しに撮影したり、左サイドや右サイドから撮影したりする。その映像を見ていたおじいちゃんに「今、何点入ったんだ」とたずねられたという話はよく聞きく。

【事例5 早送りの理解】

ビデオを見ていて早送りしていると祖母が、「なんや、へんになった」とびっくりしていた。私が「早送りしてるんや」というと「そーなんか！ へんやの」といって笑っていた（2000年ごろの記録）。

2000年ごろの記録であるので、ビデオテープレコーダー（VTR）普及期の記録である。家庭で録画視聴が始まったころである。高齢者が早送りを理解できない例といえる。新しい技術が高齢者

に理解しづらいことがわかる。

ビデオテープレコーダー（VTR）は、家庭で番組を録画して、いつでも視聴することを可能にした機械である。視聴者が録画や早送りを自分で行うことが出来たので便利であった。視点を変えて言えば、事例3、4は視聴者にとって録画や早送りが基礎知識として定着しているから、高齢者が何を間違っているか理解できていることを示している。ビデオテープレコーダーは、視聴者が生放送、録画放送の区別をつけ、番組の構成を理解する上でも貢献したといえよう。

【事例6 C.G.がわからない例】

祖母Y（83歳）、視聴時間1日平均4時間

CM『ルルかぜ薬』（遠藤久美子出演）でペンギンが登場し、縄跳びを跳ぶシーンがテレビで流れた。Yはペンギンが縄跳びをしている様子を見て、「ペンギンがこんなことをするわけがない。」と言った。半分疑いながら、半分本気になっている様子だった。Yは、「誰かがぬいぐるみの中に入って、それを小さく撮っているんじゃないか。」とっていました。

視聴者は、縄跳びをするペンギンを見て、これはコンピューター・グラフィックス（C.G.）で作っているとわかるので、本物と思うことはない。しかし、C.G.技術の高度化に伴って、不自然さを感じさせない映像が作れるようになってきている。この記録は2000年ごろのものであるが、当時、すでに高齢者にとってペンギンが本物かどうか判断するのが難しくなっていたことがわかる。ただし、「ペンギンがこんなことをするわけがない。」という言葉は、ペンギンを知っているから出てくるといえる。「誰かがぬいぐるみの中に入っている」という認識も、着ぐるみを着て演技したり、ぬいぐるみを少しづつ動かしてコマ撮りをしたりすることを知っているから出てくる言葉である。撮影に関する知識を持っている大人だから出る発言と言えよう。

【事例7 回想シーンや展開の速い番組】

祖母とTVを見ていて普通のドラマでも見ていると私はじーっと見ているのに祖母が「これ、なんでや」「これさっきもあったやん。同じこと繰り返してるんか？」などと聞いてきて、説明すると回想シーンや展開の速い話についていけないんだなあと思ったことがある。

【事例8 展開の速い番組】

私の祖母（72才）や、いとこ（7才と11才）とテレビを見ると、ストーリーが分からなくて、どうしてこんな展開になるか理解できなくて、何度も何度も内容を聞いてきます。目は一生懸命、画面を見ているのですけど。

回想シーンは、過去や現在と時制が変わるため子どもにも分かりづらい（村野井, 1992, 2002）。それだけでなく高齢者はオムニバス型の番組や放送局のザッピング対策によってつながりが分かりづらくなっている番組についてゆけないのである。

以上は、高齢者が新しい技術を知らないために生じる間違いといえよう。若い人なら週刊誌やネットを見てコマーシャルの裏話を知ったり、友だちと雑談して知識を仕入れたりするのであろう。しかし、高齢者は新しい知識を得る場が少なくなっている。社会的に生じてくる現象といえよう。

3. 演技や役回りの理解

子どもは演技や役回りについて、よく間違ふ（村野井：1992）。子どもは、時代劇や刑事ドラマの中で人が本当に死んだり、お金をもらって死んだりしていると思っている。悪役はふだんも悪い人だと思っている。高齢者は、子どもとは違った間違い方をする。知識や人生経験を使ってテレビを見ているのである。

【事例9 刑事はサボっている】

祖母Y（83歳）

金曜エンターテイメント『マジシャン刑事』（フジテレビ、2000年）で刑事が高級レストランで食事をしながら、会話をしているシーン。もうすでに事件は起きている状況だった。祖母Yは、そのシーンを見て、「こんなことをしているからだめなんだ」と批判をした。

この事例は、新潟県で少女監禁事件（2001）が発覚したとき、新潟県警が温泉で警察官僚を接待していたことが明るみに出て、その後、数々の怠慢が指摘されていた頃のものである。現実の事件とテレビの中で刑事が食事している場面が混乱していることがわかる。

【事例10 かげろうお銀の服装】

88歳のおばあさん

『水戸黄門』（TBS）を見ていて、かげろうお銀（由美かおる）を見て、「女があんな格好をして、親は何も言わんのかのお。」とため息まじりに言った。

俳優の由美かおるは、女忍者役だったので時代劇なのに短い着物を着て、編みタイツ姿で出てきました。その姿を見て、女親の立場から発言している。子どもはこのような発言をしない。

続いて、同じおばあさんの発言である。番組の司会者のお世辞を真に受けている例である。

【事例11 お世辞の理解】

88歳のおばあさん

『おもいっきりテレビ』（日本テレビ）を見ていて、みのもんたが観客席にいる年配の女性に「おじょうさん。」と呼びかけていたのを見て、「口の上手い男にだまされたらあかん。」としきりに繰り返し言っていた。

観客席にいる女性たちも、「おじょうさん」と言われて悪い気持ちはしないと思われる。しかし、もう男にだまされる年ではないであろう。これも女親の立場から発言されている。

高齢者の間違い方は、子どもと違って生活経験を踏まえていると言えよう。

4. 幼児と同じような間違い

高齢者の事例を集めると、幼児とまったく同じ間違い方が出てくる。

【事例12 一人二役の理解】

82才の姑が、同じ人物が二役しているのに、「あれはふたごか？」とテレビを見ていました。「その人が、違う二役をしているのよ」と言っても、姑は「声も同じや」と言います。ほけたのではないかと思っていましたが、それもテレビだからできることで高齢者にとっては理解できないことだったんですね。

一人二役は幼児も不思議がる。幼児と同じ間違い方をしている。

【事例13 交渉可能性と実在視】

98歳まで生きていた私の祖々母は、よくテレビを見ていたが、テレビの中に人がいると思っていたようです。そしてその中の人にも自分が見えると思っていたようでした。祖々母は信仰心のあついで、CMでも、仏がうつると手を合わせて拝み、「私はおかげで今日も生きております。」などとひとりごと（語りかけ）をいうのでした。それに、天皇が好きで、パレードみたいなので天皇がにこやかに手をふると、祖々母もにっこり、声をたててうれしそうに笑い、手をふりかえすのでした。

それと、戦争のシーン（たとえば映画等で）がうつると、とてもこわがって、テレビをけせばよいのに、自分がテレビからにげていってしまいます。また、そこにおふとんがあると、頭からかぶってかくれてしまいます。

テレビの中の人に声をかけ、手をふる例である。テレビの中の人とやり取りできていると思っている。子どもと同じように、テレビの映像を実在視している。

つぎの事例は、アニメの理解である。

【事例14 『サザエさん』の家】

70代の女性

アニメ『サザエさん』（フジテレビ）のエンディングの最後の方でサザエさん一家が一つの小さな家に入って行くのを見て、「最近の家はあんなに小さくても人がいっぱい入れるんやの。」と言っていた。

『サザエさん』のエンディングで、サザエさん一家が一列になってバンガロー風の家に入り、入った瞬間に家がグラッと揺れる場面がある。毎週放送されている。現実にな人が家に入った話と受け止めているのかもしれない。

【事例15 一休さんはかわいい顔】

これは、昨年97歳で大往生した妻の祖母の話である。妻が子どもの頃、いっしょに『一休さん』

(日本テレビ)を見ていたときに次の言葉を発したそうである。

「一休さんというのは、かわいい顔をしていたんやのー。」

アニメの中の出来事を、現実視していることがわかる。幼児もまったく同じことを言うことがある。アニメーションは人間が描いた絵を動かしていることが分かっておらず、虚構と現実が区別できていないといえよう。

つぎは、テレビの中の人とやりとりできると思っている例である。子どもはテレビの中の人に自分の声が聞こえるし、あちらから自分を見ていると思っている。テレビの人に向かって手をふったりする。交渉可能性と呼ばれる現象である(村野井, 1986, 1989)。高齢者でも現れることがわかる。

【事例 15 こっちを見ている 交渉可能性の理解】

Yさんの義理のおばあさんが90歳代の頃

自分(このおばあさん)が着替えようとするとき、テレビの方を見て、画面に映っている男の人を指さし、「あの人、こっち見てるから恥ずかしいで、着替えれん。」と言った。

幼児は3・4歳になればテレビの中的人是自分を見ていないということがわかる。幼児は、テレビの中の人自分が自分を見ていないことを確認するために、テレビの前で、わざと汚い言葉を言ってみたり、風呂上りに裸で歩いたりする。一見ばかげた行動であるが、テレビ理解をする上では重要な確認作業といえる。

視点を変えて言えば、テレビには人間が映るが、本物の人間ではないという認識を持たなければテレビを視聴できないのである。普段、私たちは人間がそこに存在しているかどうかを姿と声、つまり光と音で認識している。その人の臭いや体温を感じる距離まで近づくことはあまりないといえる。触って確認することはめったにない。五感を使うのは、親子や恋人たちくらいなのである。私たちは、人間がそこにいるかないかを光と音で人間を確認している。テレビは光と音を出す。普段、人間がそこにいることを認識する条件と同じである。したがって、テレビは実在視しやすいメディアと言うことができる。

テレビを見るためには、画面に出ている人間は、人間ではなく人間の映像であるという認識を持たなければならない。子どもがテレビに触ったり、たたいたり、テレビの中の人に話しかけたり、テレビの前で汚い言葉を言うのは、テレビの中の人間を実在視しなくなるために大切な行動といえる。

【事例 17 お茶を出してあげなさい】

Kさんのおばあさん(年齢不明)

テレビで演芸の番組を見た後、「こんなに汗をかいて芸をしてくれたんだ。お茶を出してあげなさい」と言った。

映像を実在視している例である。お茶を飲ませてあげられると思っているのだから、テレビの中の人と交渉することが出来ると思っていることも分かる。

これらの事例は、幼児のようにテレビをわかってゆく過程と、その逆にわからなくなってゆく過程があることを教えてくれる。テレビをわかることの難しさがわかる例である。

5. 高齢者独特の間違い

次の事例は、子どもでは出現したことがない。高齢者独特の間違いである。

【事例18 映像とナレーションの同時理解】

Y・Wさんの祖父Sさん（76歳）、視聴時間1日平均2時間程度。祖母Mさん（74歳）、時間があるとテレビをよく見る。

番組名は不明。魚が泳いでいるシーン。同時にナレーションでその魚についての説明をしている。SさんとMさんは、興味深げにその番組に見入っていた。そして、二人はその魚を見ながら、「この魚はなんて言う魚だろう。」などと話し合っていた。

二人とも特に難聴ではない。映像に集中するあまりナレーションを聞き逃したといえる。音と映像の組み合わせの問題ともいえる。情報の同時処理の問題といえるかもしれない。

子どもは音と映像の組み合わせを間違えることはある（村野井・宮川、1995）が、2つの情報の同時処理ができないということはない。映像とナレーションを同時に理解できない例は、山本の研究では32例中5例現れている。高齢者の特徴といえよう。

以上、高齢者のテレビ理解について事例をあげてきた。まとめると次のようになる。

大人はテレビを見ることができると思われているが、高齢者には間違って視聴する例もあることが示された。高齢者の間違い方には、幼児と共通なものと、高齢者独特のものがあつた。幼児と共通するものは、実在視や交渉可能性の理解と役回り、アニメの理解など虚構と現実の区別であつた。高齢者独特のものには、（1）映像技術の知識が不足するために生じると思われる現象がある。知識の不足は、C.G.の理解や映像のリピート放送の理解があげられる。知識不足に対する何らかの対策は可能といえる。（2）高齢化にともなつて必然的に起きると思われる現象がある。これは、映像とナレーションの2つを同時に処理することが困難になることであつた。

考察

高齢者は、新しい技術などの情報を得られないままに過ごした結果、テレビを分からないままに視聴し、一部を無視したり、混乱したりしながら視聴している可能性がある。積み残しあるいは社会的条件の不足という考え方である。また、年齢が進むとともに認知能力が弱くなり、幼児のような見方になってしまう可能性もあると言える。テレビを見られるようになる過程があるのと同じく、衰えて行く過程があるという考え方である。そして、加齢による独特の現象が出現する。高齢者独特の誤解や曲解あるいは同時処理の低下である。まとめると以下ようになる。

1. 新技術に対する知識の不足（C.G.を現実と間違ふ、再現映像がわからない）
2. 子どもと同じような間違い（テレビの中に人がいる、テレビから見られる等）

3. 高齢者独特の間違い（知識を持った上で役回りや演技を誤解する。音と映像の同時処理ができない）

この研究は、事例を分類した研究であって、典型例を示したものである。今後は、高齢者へのインタビューを行ったり、高齢者福祉施設につとめる職員へ調査したりすることで事例を増やし、詳細な分類をして行く必要があるだろう。

日本は、高齢化が進んでいる。今は、若い人向けにテレビ番組が作られているが、テレビをいろいろな人に視聴してもらうためには、高齢者にも配慮して行かねばならないといえる。高齢者が間違っていることを番組制作者へ伝えて、わかりやすい番組を作るように促す必要がある。そして、新しい技術や知識をどのようにして高齢者に伝えるべきかという問題は、生涯学習の課題いえるであろう。

引用文献

- 村野井均．1989.「幼児のテレビ理解の発達 - 1 事例の4年間の観察から -」, 福井大学教育実践研究, 第14号, 235-252
- 村野井均・宮川祐一．1995.「NHK 教育「できるかな」におけるナレーターの認識」, 日本視聴覚・放送教育学会, 第2巻, 第1号, 28-38
- 村野井．1992.「大学生の回想に表れたテレビ理解の困難さ」, 福井大学教育学部紀要, 第IV部, 第44号, 111-126
- 村野井均．1986.「テレビに映った人間の映像とその演技に関する乳幼児の認識」, 弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要, 第22号, 41-51
- 村野井均．2002.『子どもの発達とテレビ, かもがわ出版
- 山本奈津代・三嶋博之．2001.「高齢者のテレビ理解の事例的研究」, 石川県教育工学研究会, 研究紀要, 第26号, 41-43